

平成23年度共同研究の概要（成果報告書抜粋）

研究種目：一般研究

研究代表者：加藤 博（一橋大学大学院 経済学研究科・教授）

研究分担者：長谷川奏（早稲田大学エジプト学研究所・准教授）、岩崎えり奈（共立女子大学文芸学部・講師）、松岡延浩（千葉大学大学院園芸学研究科・准教授）、藤巻晴行（鳥取大学乾燥地研究センター・准教授）

研究題目（和文）：

下エジプト地方の灌漑システムに関する学際的研究 — 地域研究、考古学、自然科学の共同研究

研究概要（和文）：

エジプトは古来、典型的な水利社会としての歴史を歩んできた。しかし、それ歴史は単調なものではなく、水利事情によって栄枯盛衰を繰り返した。本研究は、下エジプト・西部デルタ地方、ブハイラ県に位置するシーディー・オクバ村周辺地域を事例に、考古学的なデータ・情報、リモート・センシング、GIS、歴史地図・灌漑地図、社会調査、文献資料などの様々なデータや情報を使い、エジプト社会における水の非持続性とそれに対処する灌漑システムの展開を明らかにすることを目的とする。研究対象であるシーディー・オクバ村周辺地域は、現在でこそ水の豊かな農村風景が展開しているが、エジプトのデルタ地域のなかでも、19世紀以降の近代において最も遅れて開発された新開地である。ところが、興味深いことに、この近代と当初にあっては不毛であり、土地開発がもっとも遅れて展開した地域に、多くの考古学的な遺跡が残されているのである。つまり、この地域では、古代において栄え、中世において衰退し、近代において再開されたのである。この興味ある長いスパンでの歴史の展開において、どのような環境学的、経済学的、生活様式的、生活文化的、技術的な要因がかかわったのか。それを灌漑技術に焦点をあてて探求してみると、19世紀末から20世紀初めにかけての調査地の開拓が、古代の遺跡である小高い丘を利用する形で、伝統的な自然（ベイスン）灌漑システムと近代的な運河網の完備を中心とした近代的な人工（通年）灌漑の融合によってよってなされたことが明らかになった。